

謝々!! ジャッキー先生!!

石川 光

その日、「パートタイム」の仕事にあぶれて、神田橋の女子職業安定所からの帰り、いつものように神保町の書店街を歩いた、歩いた。角の本屋さんに入って、文藝雑誌を開いた。全国同人雑誌賞!「女子大生・曲愛玲」!瀬戸内晴美。即ち、ジャッキー先生の記事と写真にお目にかかった。えっ!?私と同じ徳島県!?訪ねて行って、ようやくお会いできた……。

それから――

徳島が誇る今は亡き世界の大作家、宗教家、瀬戸内寂聴先生、怖れながら、ジャッキー先生と若かりし頃、練馬のご自宅で、ハリー・ベラフォンテのCDを聴いた。

ディーオ ディーオ
コンビスタ タリバン タリニ
バナーナ

ラムでもので、待っていてネ

“それ、エラヤツチャ!エラヤツチャ! ヨイ、ヨイ、ヨイ……”

私とジャッキー先生はカリプソのリズムにのって、ふるさとの阿波踊りを踊った。踊った……。

満開の桜！

徳島眉山の麓、「教室」？でなつかしいやき餅をいただきますながら、ポルトガルの文人、モラエスと、おヨネさま等の話をした……。

ずっと後になって、ポルトガルを訪ねた夜、リスボアの酒場で、A・ロドリゲスの「暗いはいけ」？を現地の女性歌手が絶唱するのを聴いた……。

ジャッキー先生のおみやげに、CDを買った。しかし、ついに、お届けする機会をのがしてしまった……。

いつだったか、あの頃、訪ねて行ったお邸の大きなお風呂に入らせてもらった。「岡本かの子」を執筆の頃だったか？あまりに熱いお湯だったので、思わず「イタイツ！イタイツ！」——とふるさとはがでてしまい、叫んでしまったのだった。後になって、ジャッキー先生は「あなたはトクシマの子だね」とゲラゲラ笑っていた……。

お忙しいところ、懸賞小説にはずれた拙作をお読み下

さって、わざわざ電話を下さった。

妻が夫の浮気をなりふりかまわず上司に訴える個所を挙げて、あの主人公の言動はミーハーだ。私だとあんな妻は、即、離婚する、と怒っているのだった。小説の品を無くしているとも……。

「さよなら、H・Sさん」という小説、四百字詰め、八十枚を書いた。昭和三十年代のお世話になったありがたいかかわり合い、青春の譜？を小説にしたものだった。

群馬県の文学賞をいただいた。「現役の女性作家をモデルに描くことは、それだけに難しい問題が包蔵されている。如何に虚構を加えても、心のかげりを描き切ることには難しく、突っこみが足りない、今一つ切り込んでもらいたかった」等、評された。

ジャッキー先生は、何もおっしゃらなかった。何も……。

名作「夏の終り」の涼太さんは、ジャッキー先生のお世話でようやくの就職先の取締役だった。おやさしい涼太さんは、弱い立場の人の理解者であり、味方でもあった。私

としては、コマーシャル原稿等の手伝いをさせてもらったりして何かとお世話になった……。

涼太さんとの離別を決めて、ジャッキー先生は大いに涙をながし、怒り、果てはゲラゲラ笑ってしまったのだった……。ゲラゲラゲラゲラ。

徳島の取材からお帰りになって、同行された大井上光晴先生のことを話題にされた。エッ！恐れながら、あの狼煙の人！文学伝習所の。文学者として、男性として、超人気の作家。特に若者達に。

「万事にいろはず、一切を捨離して孤独なるを死するといふなり」

「生ぜしもひとりなり、死するも独りなり。されば、人と共に住するも独りなり、そいはつべき故なり」

一遍上人 語録

古稀の旅 法臘二十 宴まどか

寂聴

「いつ寂聴先生は仕事をなさるのか。不思議に思う。さして大きくも強そうでもない あの軀で——作家的消化力のすごさといひ 仏教的燃焼のすさまじさといひ——不思議といわずになんといえるのなや。寂聴先生は、夜な夜な寂庵をぬけだして比叡なる天台の谷へともぐりこみ 六根清浄のボレロにのつて ペンをはしらせているとわたしは思ってしまう」

(寂庵だより 柳 莫山)

富士正晴(徳島県 山城町出身 一九一三—八七) 全国同人雑誌賞、第一回が平成十二年十一月徳島県山城町であつた。選考委員をされた寂聴先生、ジャッキー先生は「地方は健在なり、この賞が長く続くことを祈ります」と歓迎のことばをのべておられる。現地、写真があつた。

文藝同人誌、わが「伊勢崎文学」(昭和五十三年発行)も応募した。

第十六回国民文化祭ぐんま二〇〇一年「生命の発見」で、「書くことは生きること——わくわく自分史フォーラム」を企画、開催した。全国、海外からもおよそ六百冊の生命の書、自分史が寄せられた。

ジャッキー先生に、私が企画した自分史——国民文化祭のお便りをした……。

ジャッキー先生と仲のよかった狐狸庵先生、遠藤周作が徳島を訪ねた折、「晴美せんべい」だか、「まんじゅう」だか売っていたというおハナシ？うそかほんとか、ほんとうそか。某週刊誌で。

いつだったか、三島由紀夫の短編、「煙草」が話題になった。ジャッキー先生が少女小説を書いていた頃のペンネーム、三谷晴美は三島由紀夫が特別の名付親だった……。恐れながら、もしかして、ジャッキー先生が「小説」三島由紀夫、または「伝」を執筆されたら!?……。天才が天才を書く…… と思ったりして。

昭和四十五年十一月二十五日、東京、池袋のデパートで三島由紀夫展(書物の河 舞台の河 肉体の河 行動の河)を見た。

令和三年十一月九日、ジャッキー先生は、旅立たれた。

京都、嵯峨野「寂庵」——「偲ぶ会」にようやく参列……。
かなしい。かなしくて、かなしくて、きりもなく涙が……。どうすればいいのか……。

2024.5.30